

1月に刊行した『人生は、燦燦（さんさん）と 校長室だより 100選』を家人の実家にも1冊贈った。家人の母親、私からすると義理の母は、文章を読む人だということはわかっていた。どうやら、少しずつ読んでくれたようだった。

ある日、家人が実家に行きたいと言い出した。お母さんが、本を読んだ感想を言っているから、直接、私に聞かせたいのだという。そうであるならばと出かけた。

いつも思うのだが、一つの本を読んでも、読む人によってとらえ方が違う。心に響く、心に残る気に入る文章、箇所、フレーズは、人それぞれである。その人の年齢にもよるだろう。職業も影響するかもしれない。

義理の母は、自分の子育てを反省したのだという。もっと娘に本を買ってあげればよかったと。年配の母に、そんなことを思わせてしまったことを申し訳ないと思った。そんなふうに考える読者もいるのかと勉強になった。

娘、すなわち家人が小さい頃、絵本の読み聞かせはしていた。だが、本を買ってあげられなかった。そのことを悔いているという。傍らの家人は、そんな話を初めて聞いたと言っていた。どうやら、前掲の本に載っている「チキンライス」の話を読み、私が母親に本を買ってもらっていたことを知り、自分のことを悔やんだらしい。

この話は、私が小学4年生か5年生くらいのことである。残念ながら、小さい頃は絵本を読んだ記憶もないし、読み聞かせをしてもらった覚えもない。母親は忙しく、とてもそんな余裕はなかったように思う。

家人が言っていた。本は買ってもらえなかったかもしれないが、近くに市立図書館があり、よく連れて行ってもらったと。それがうれしかったと。家人は、懐かしそうに幸せそうに話してくれた。義理の母は、ちゃんと娘の教育をしていたわけである。

私よりも、家人のほうが想像力に長けている。文学的文章を読む感性が豊かである。それは、きっと読み聞かせと市立図書館のおかげだと思う。すなわち、お母さんの子育ての賜である。小さいうちが大事である。ということは、幼稚園の年代が重要だということである。幼稚園には、たくさんの絵本がある。子どもたちは、読み聞かせのときには、食い入るように聴いている。時代は変わっても、絵本や読み聞かせが子どもに及ぼす影響には変わりはない。

子育てに後悔がない人などいないのではなかろうか。ベストがないし、100点もない。それでいいのだと思う。義理の母の思いは、しっかりと娘に伝わっている。今回のことで、そのことがわかった。